

## 「VN型」自他両用動詞についての考察 ——自動詞文の種類を中心に

徐 媛

**要旨**：従来の自他両用の二字漢語動詞に関する研究は、主に「非対格自動詞・他動詞」というタイプに重点を置かれている。しかし、自他両用動詞といえ、同じ意味を表す上で、自動詞としても他動詞としても用いられる語が広範囲ですべて自他両用動詞と認定すべきである。本研究は、同じ意味を有する一つの語形で自動詞としても他動詞としても使われる動詞を自他両用動詞と定義する。その中の「非能格自動詞・他動詞」という関係を持つ「VN型」自他両用動詞の自動詞文の種類、特徴及び成立条件を考察していきたい。

**キーワード**：「VN型」自他両用動詞 非能格自動詞文の種類 自動詞文の特徴

### 1、はじめに

和語動詞の自他対応動詞（有対動詞）は次のような統語的關係を持っている。

有対自動詞文： ガラスが 割れた。

有対他動詞文： 太郎が ガラスを 割った。

影山（1996:18）では、自動詞文の主格名詞の特徴により、自動詞を更に非能格自動詞と非対格動詞に分けている。非能格自動詞とは、主語に立つ名詞が、深層構造において他動詞文と同じように動作主を表し、意図的に動作・行為を行うことができる動詞である。一方、非対格自動詞は、状態や位置が変化するものを主語に取る動詞であり、それらの主語は深層構造で対象物で、自分の意志で動作するのではなく、何らかの変化を被る動詞であると定義した。項構造で表すと、次のようなものである。

外項 内項

他動詞： ( x < y > ) 太郎が ガラスを 割った。

非能格自動詞： ( x < > ) 太郎が 走る。

非対格自動詞： ( < y > ) ガラスが 割れた。 (影山 (1996:21))

二字漢語動詞の中に、和語の有対動詞と似ているような統語構造を持つ動詞もあり、語自身で、自動詞か他動詞か判断できないが、統語的には判断できる。例えば、

- a、問題が解決した。
- b、問題を解決した。

について、「解決する」は、和語の有対動詞と同じ文法的振る舞いをしている。このような漢語動詞は、自動詞と他動詞との形態上の弁別がなく、自動詞として他動詞として同じ語形で用いられるため、自他両用動詞とされる。

従来の自他両用の二字漢語動詞についての研究は、主に非対格自動詞－他動詞との関係を持つ動詞に集中し、非能格自動詞・他動詞との関係を持つ動詞を自他両用動詞と認められず、考察対象外とした(小林(2004))。しかし、これらの両用法を持つ漢語動詞を考察範囲から排除するのは、主に和語動詞の有対動詞の基準によって定められたものであり、漢語動詞と和語動詞は、様々な面において、異なる文法性質を現しているため、すべて和語動詞の基準によって漢語動詞を考察するのは、必ず漢語動詞に特有の性質を見逃すところがあると思われる。今回の考察対象である「VN型」自他両用動詞はその一つである。

小林(2004)、楊(2009)、王(2015)では和語の自他対応動詞の概念により自他両用の二字漢語動詞を次のように定義した。

- a、意味的条件：自動詞文と他動詞文が同一の事態の側面を叙述していると解釈可能である。
- b、形態的条件：自動詞と他動詞が同一の音形を共有している。
- c、統語的条件：自動詞文のガ格と他動詞文のヲ格が同一の名詞句で対応している。

例：a、業者が工事を中断した。

b、工事が中断した。 (王(2015:142))

自他両用と言えば、そもそも一つの動詞は、意味が同じである上に、自動詞か他動詞か両用の使い方が持てるのはその真の意味である。つまり、自動詞文のガ格と他動詞文のヲ格が同一の名詞句で対応しているもののほか、自動詞文のガ格と他動詞文のガ格と同じ動作主を表す両用動詞も考察範囲に入れるべきである。よって、自他両用の漢語動詞の全体像を把握するために、小林(1997)で排除した以下の種類の漢語動詞も自他両用漢語動詞と認定する。

- a、太郎がA銀行に預金している。
- b、太郎がお年玉をA銀行に預金している。 (小林(1997:111))

楊(2009)では国語辞典において自他両用動詞として認定されている漢語動詞の中には、「非対格構文 vs 対格構文」、「非能格構文 vs 対格構文」の2種類があることを指摘し、また「非能格構文 vs 対格構文」の対応関係を持つ動詞を更に①典型的な「非能格構文 vs 対格構文」タイプ、

②「動作主体＝変化主体」タイプ、③「再帰的目的語」をとるタイプ、④「同族目的語」をとるタイプに分けている。楊(2009)は「非能格構文 vs 対格構文」の関係に関して、重要な先行研究であると言える。しかし、これはただ「非能格構文 vs 対格構文」の下位分類をし、その種類に属する自他両用動詞は、語構成にはどのような特徴があるか、非能格自動詞文として成立する理由はなんであろうか、また、同じ語構成を持つ動詞でも非能格構文において同じ特徴を呈するのかについてまだ研究されていない。本稿はこれらの問題に関して、非能格自動詞－他動詞というタイプの自他両用動詞を考察していく。

先行研究を踏まえ、自他両用の二字漢語動詞の種類を考察してみたら、①非能格自動詞－他動詞(非能・他と称する)②非対格自動詞－他動詞(非対・他と称する)③非能格自動詞－非対格自動詞－他動詞(非能・非対・他)の三つのタイプに分けられることが分かった。そして、筆者の前期調査によって、非能・他タイプの自他両用動詞の多数は、「VN型」の漢語動詞に集中することが分かった。今回の考察は、主に「VN型」の自他両用動詞を取り立てて、その非能格自動詞文の特徴を考察してみようとする。

## 2、辞書における「VN型」自他両用動詞の実際考察

『岩波国語辞典』、『学研現代新国語辞典』『明鏡国語辞典』、『日本語能力試験出題基準』で何れか「ス自他」と標記された「VN型」自他両用の二字漢語動詞は、56語がある。しかし、国立国語研究所(1971)、森田(2000)、楊(2009)で指摘したように、辞書に標記された漢語の品詞にずれているものがあるため、実例による品詞判断、特に漢語動詞の自他性に関する実例判断が必要になってきた。従って、上述の「VN型」漢語を更に名詞的要素と動詞的要素との結合関係により、ヲ格の補足関係を持つタイプと持たないタイプに分けてから、bccwj及び朝日新聞コーパスで実例を検証しながら、自他判断を行った。結果として次の二つの表が得られた。

表1 ヲ格の補足関係を持つ「VN型」自他両用動詞(45語)

辞書、能力試験、コーパスの自他(語幹のみ表示する)

| 語例 | 岩波              | 明鏡 | 学研 | 能力 | コーパス |
|----|-----------------|----|----|----|------|
| 発音 | 他               | 他  | 他  | 自他 | 非能・他 |
| 受験 | 他               | 他  | 自  | 自他 | 非能・他 |
| 決心 | 自               | 他  | 他  | 自他 | 非能・他 |
| 棄権 | 他自 <sup>1</sup> | 他  | 他  | 自他 | 非能・他 |
| 聴講 | 他               | 自他 | 他  | 他  | 非能・他 |

<sup>1</sup> 『岩波』では、「自他」「他自」でそれぞれ、自動詞に偏っているか他動詞に偏っているかを示している。

|    |    |    |    |    |      |
|----|----|----|----|----|------|
| 分業 | 他  | 自他 | 他  | 他  | 非能・他 |
| 輸血 | 自  | 自他 | 自他 | 他  | 非能・他 |
| 負傷 | 自  | 自他 | 自  | 自他 | 非能・他 |
| 点火 | 自  | 自他 | 自  | 自  | 非能・他 |
| 取材 | 自  | 自他 | 自他 | 自他 | 非能・他 |
| 排水 | 自他 | 自  | 自他 | 自  | 非能・他 |
| 出品 | 自他 | 自他 | 他  | 自  | 非能・他 |
| 注目 | 自他 | 自他 | 自他 | 自他 | 非能・他 |
| 配慮 | 他自 | 自他 | 自他 | 自他 | 非能・他 |
| 決意 | 自他 | 他  | 他  | 自他 | 非能・他 |
| 心配 | 自他 | 他  | 他  | 自他 | 非能・他 |
| 発想 | 自他 | 他  | 他  | 自他 | 非能・他 |
| 送金 | 自  | 自他 | 自他 | 自  | 非能・他 |
| 用心 | 自  | 自他 | 自  | 自  | 非能・他 |
| 記名 | 自  | 自他 | 自  | 自  | 非能・他 |
| 出題 | 自  | 自他 | 自他 | 他  | 非能・他 |
| 署名 | 自  | 自他 | 自他 | 自  | 非能・他 |
| 発言 | 自  | 自他 | 他  | 自  | 非能・他 |
| 投書 | 自他 | 自他 | 他  | 自  | 非能・他 |
| 作曲 | 自他 | 自他 | 自他 | 他  | 非能・他 |
| 減点 | 自  | 自他 | 他  | 自  | 非能・他 |
| 出費 | 自  | 自他 | 自他 | 自  | 非能・他 |
| 讓步 | 自  | 自他 | 他  | 自  | 非能・他 |
| 集金 | 他自 | 自他 | 自他 | 自他 | 非能・他 |
| 司会 | 自他 | 自他 | 他  | 自他 | 非能・他 |
| 貯金 | 自他 | 自他 | 自他 | 自他 | 非能・他 |
| 預金 | 自他 | 自他 | 自他 | 自他 | 非能・他 |
| 借金 | 自  | 自他 | 自  | 自他 | 非能・他 |
| 発電 | 自  | 自他 | 自  | 自  | 非能・他 |
| 開会 | 自他 | 自他 | 自他 | 自他 | 非対・他 |

|                 |    |    |    |    |         |
|-----------------|----|----|----|----|---------|
| 閉会 <sup>2</sup> | 自他 | 自他 | 自他 | 自他 | 非対・他    |
| 断水              | 自他 | 自他 | 自他 | 自他 | 非対・他    |
| 加速              | 自他 | 自他 | 自他 | 自他 | 非対・他    |
| 着色              | 自  | 自他 | 自  | 他  | 非能・非対・他 |
| 営業              | 自他 | 他  | 他  | 自  | 非能・非対・他 |
| 骨折              | 自他 | 他  | 他  | 自他 | 非能・非対・他 |
| 用意              | 自他 | 他  | 他  | 自他 | 他       |
| 加熱              | 他  | 他  | 自他 | 他  | 他       |
| 離婚              | 自他 | 自  | 自  | 自  | 自       |
| 出血              | 自  | 自他 | 自  | 自  | 自       |

表2 ヲ格の補足関係を持たない「VN型」自他両用動詞(11語)

辞書、能力試験、コーパスの自他(語幹のみ表示する)

| 語例              | 岩波 | 明鏡 | 学研 | 能力 | コーパス    |
|-----------------|----|----|----|----|---------|
| 同調              | 自  | 自  | 自  | 自他 | 自       |
| 還元 <sup>3</sup> | 他自 | 自他 | 自他 | 他  | 他       |
| 食事              | 自  | 自他 | 自  | 自  | 自       |
| 結果              | 自他 | 名  | 自  | 自他 | 自       |
| 声明              | 自他 | 自他 | 他  | 自他 | 非能・他    |
| 電話              | /  | 自他 | 自  | 自  | 非能・他    |
| 中和              | 自他 | 自他 | 自他 | 自他 | 非対・他    |
| 復旧              | 自他 | 自他 | 自他 | 自他 | 非対・他    |
| 中断              | 自他 | 自他 | 自他 | 自他 | 非対・他    |
| 徹底              | 自  | 自他 | 自  | 名  | 非対・他    |
| 集中              | 自他 | 自他 | 自他 | 自他 | 非能・非対・他 |

<sup>2</sup> 「用意」「加熱」「離婚」「出血」の4語について、实例考察の上で、自動詞か他動詞かの用例は一、二例しか持たず、用法上のゆれと見られるので、自他両用動詞から取り除くことにする。

<sup>3</sup> 「還元」の意味項目(『岩波』『明鏡』『学研』)には①根源的なものに(再び)もどす、またはもどること。②酸化に対し、酸化物から酸素を取り去ること。更に広く、水素と化合し、または電子を得ることという意味があり、②の化学用法の例文を除くと、①の意味用法は他動詞に限られることが分かった。

上述の表から分かるように、辞書や能力試験で自動詞か他動詞か自他両用かと記された語は、実例において、自動詞か他動詞かの用法しか持たない語が確かに存在している。そして、実例によって、「VN型」自他両用動詞の中には、従来の研究対象である「非対・他」種類のほかに、「非能・他」更に「非能・非対・他」の種類もある。また、次の表3から分かるように、ヲ格の補足関係を持つ「VN型」自他両用動詞には、「非能・他」という種類が数多くあることが分かった。

表3 「VN型」自他両用動詞の種類における語数

| 名詞要素と動詞要素との関係 | 自他両用動詞のタイプ | 語数 | 比率  |
|---------------|------------|----|-----|
| 補足関係を持つもの     | 非能・他       | 34 | 83% |
|               | 非対・他       | 4  | 10% |
|               | 非能・非対・他    | 3  | 7%  |
| 総計            | 41語        |    |     |
| 補足関係を持たないもの   | 非能・他       | 2  |     |
|               | 非対・他       | 4  |     |
|               | 非能・非対・他    | 1  |     |
| 総計            | 7語         |    |     |

ヲ格の補足関係を持たない「VN型」自他両用動詞は、語構成要素には名詞的要素と動詞的要素で分析できるが、結合関係は補足関係を持つ動詞のように明確に内部分析を行うことが困難である。よって、これらの語の内部分析を行わず、全体性を重視し、それについての分析を今後にする。また、非対・他／非能・非対・他タイプに関しての考察も今後の課題にする。よって、本稿は主に34語のヲ格の補足関係を持つ非能・他の自他両用動詞のタイプに重点を置き、これらの語の自動詞文の種類及び成立原因を分析してみる。

### 3、補足関係を持つ「VN型」自他両用動詞の種類

これらの両用動詞に関して、自動詞文の特徴によって、次の2種類に大別できる。

種類Ⅰ 文において統語的には自動詞文でありながら、意味的には他動詞文のようなもの。

種類Ⅱ 文において統語的にも意味的にも自動詞文であるもの。

補足関係を持つ「VN型」動詞は、名詞的要素と動詞的要素との間に、ヲ格関係を持つゆえ、普段、これらの二字漢語動詞を文のように解釈できる。例えば、「出題する」は「問題を出す」、「棄権する」は「権利を棄てる」、「集金する」は「金銭を集める」のように解釈できる。この内

部構造を持つ動詞は、自動詞として使われる時、統語から見ると目的語を持たない自動詞文と同じようでありながら、意味上には、典型的な他動詞文と同じようなものもあれば、統語的にも意味的にも自動詞文であるものもある。

次は、「VN型」自他両用動詞をその2種類に分けて、非能格自動詞文の特徴、成立する原因を考察していく。

#### 4、補足関係を持つ「VN型」自他両用動詞への考察

##### 4.1 種類I：文において統語的には自動詞文でありながら、意味的には他動詞文のようなものについての考察

このタイプに所属する語は、以下のようなものがある。

受験、棄権、発音、聴講、出題、排水、作曲、集金、貯金、預金、借金、負傷、輸血、出品、分業、点火、減点、出費、送金、発電、署名、記名、  
投書、発言、司会、取材、注目、決心、決意、譲歩 (30語)

それらの語全体の意味は、殆ど構成要素の名詞的要素と動詞的要素との結合で表す意味と同じである。次は、これらの語の自動詞文の特徴を見てみよう。

- (1) 上下の入れ歯を入れて、スムーズに発音できないとおっしゃっていた患者さんといっしょに…。(くちびる美人ダイエット)
- (2) だが、子どものときから、男子と肩を並べて勉強し、受験し、社会に出てからも、法的にも実際的にも、男女の別なくがんばってきた女性たちも…。(ブライダル革命)
- (3) いつ訪ねてもモーツァルトは机に向かって作曲していた。(ベートーヴェンと蓄音機)
- (4) それでも人数が多いので、急遽、会場の机をとりはらって、百四十八名全員が聴講できるように対応した。(心と社会をはかる・みる)

例(1-4)は、非能格自動詞文は構文「XがYする」を持っている。「発音」の動詞的要素「発」と名詞的要素「音」とは、「音を発する」のようなヲ格の補足関係を持っている。又、「受験」は、「試験を受ける」、「作曲」は、「曲を作る」、「聴講」は「講義を聴く」で、すべてヲ格の補足関係を成している。

これらの語は、種類Iの非能格自動詞文になれる原因を以下の2点に従って、分析していく。  
条件1：語「VNする」を文「NをY(する)」のように分解できる。

条件2：文脈により名詞的要素の表す意味を特殊化する必要がなく、その要素が十分に意味情報を伝えることができる。

まず、条件1について、それらの語全体の意味は、名詞的要素と動詞的要素の結合で表す意味と同様である。そして、両要素の結合関係は、ヲ格の補足関係で、語全体をヲ格他動詞文のよ

うに分解できる。つまり、形式には語の形でありながら、意味的には他動詞文のような意味を表し、文中に共起する主語は、意図的ないし意志的な行為を表す動作主を要求するのが当然になる。この点では非能格自動詞の性質を持てるようになった。この種類の動詞は、統語上には

- (1)' 患者さんはスムーズに発音できない…
- (2)' (女性たちは) 男子と肩を並べて勉強し、受験し、社会に出てからも…
- (3)' モーツァルトは机に向かって作曲していた。
- (4)' 百四十八名全員が聴講できる。

という動作主が意図的に動作・行為を行う非能格自動詞文である。しかし、意味上には、

- (1)" 患者さんはスムーズに音を発することができない…
- (2)" (女性たちは) 男子と肩を並べて勉強し、試験を受け、社会に出てからも…
- (3)" モーツァルトは机に向かって曲を作っていた。
- (4)" 百四十八名全員が講義を聴くことができる。

という他動詞文の意味を表す。これは二字漢語動詞の特徴に深く関わる。仁田(1980)は「語構成に文構成を見、文構成に語構成を見る」という姿勢で漢語動詞を分析した。それによって、両要素が補足関係を持つ「VN型」漢語動詞が表す意味は、より一層具体的な事象に絞ることができる。

次は、条件2について、以上の語の他動詞文用法と比較しながら、分析していこう。

- (5) 発音については音声的干渉として、日本語の発音に慣れた私たちの舌が英語を発音することを妨げてしまうし… (英語の学び方)
- (6) アメリカ人は、八、九割まで、はじめの a を強く発音し、あとの a を弱く曖昧母音にしてしまうので…。(月は東に日は西に)

例(5)(6)は、他動詞文の用例であり、「発音」という動作の対象を具体的に明示する場合、「英語」「はじめの a」という対象語が必要になり、その対象語がなければ、文全体の意味は不完全になってしまう。しかし、非能格自動詞文の例(1)について、文脈から見ると、「発音」の対象を具象化する必要がなく、「上下の入れ歯を入れる」ことの影響で、「スムーズに発音できない」という結果を引き起こすことを述べるだけである。この場合、「音を発する」ということの方に重点を置き、発音したのは何かについて不関心である。つまり、この場合、「発音する」の「音を発する」そのことだけを表現するのである。

これと同じように分析できるのは、次の「作曲する」の例もある。

- (7) また彼はドシュコヴァー女史にお礼のしるしとして、もうひとつの美しい詠唱曲『わたしの美しい恋人よ、さようなら』を作曲した。(プラハ幻影)



(8) ヴェルディが、《ファルスタッフ》のリブレットを作曲し始めるにあたって、イタリアの伝統的喜劇、それもゴールドニスG o l d o n i sに没頭したことは、よく知られている。(ファルスタッフ)

例(7)(8)の「作曲」は他動詞の用例である。例(7)について「女史にお礼のしるし」は、作曲された「詠唱曲『わたしの美しい恋人よ、さようなら』」という曲であり、この場合、「作曲する」(曲を作る)について、「曲」の内容を具体化させることは必要になってきた。例(8)について、「ヴェルディがゴールドニスに没頭した」のは、ほかの曲を作った時ではなく「《ファルスタッフ》のリブレットというものを作曲する」時に限定されており、この場合、「作曲」という動作の対象を具体的に明示する必要がある。無論、目的語がないと不完全な文になるわけではないが、原文との意味が変わるようになってきた。

(7)' また彼はドシュコヴァー女史にお礼のしるしとして、作曲した。

(8)' ヴェルディが、作曲し始めるにあたって、イタリアの伝統的喜劇、それもゴールドニスG o l d o n i sに没頭したことは、よく知られている。

例(7)'(8)'の「作曲する」は、自動詞文であり、二つとも文法的でありながら、表す意味は例(7)(8)と違ってくる。例(7)'は「お礼のしるし」は「作曲する」という行為であり、例(8)'は「ヴェルディがゴールドニスに没頭した」のは何か特別な曲を作った時期ではなく、「始めて曲を作る」時であった。この場合、文の重点は、「曲を作る」(作曲する)そのことであり、「曲」はどんな曲か、特殊化される必要がなくなった。この二文は例(3)の「いつ訪ねてもモーツァルトは机に向かって作曲していた」のように、作曲するものに関心を持たず、いつ訪ねる時、モーツァルトは「曲を作る」(作曲する)そのことに没頭して、どんな曲か不問になり、その行為のみに重点を置くことが分かった。

以上では種類Ⅰの非能格自動詞文の特徴を分析してきた。そのタイプの「VN型」自他両用動詞の非能格自動詞用法の成立条件を具体的に以下の2点にまとめられる。

i、名詞的要素と動詞的要素で表す意味情報は、語全体の意味情報と同量である。又、名詞的要素と動詞的要素との間にヲ格の補足関係を持ち、語全体の動作を実現するのは意図性を持つ動作主を要求する。

ii、文脈の条件について、ほかのことに関心を持たず、名詞的要素と動詞的要素で表す事態そのものに注目点が置かれる。つまり、文脈により名詞的要素の表す意味を特殊化する必要がなく、名詞要素だけで十分に意味情報を伝えることができる。

#### 4.2 種類Ⅱ：文において統語的にも意味的にも自動詞文であるものについての考察

このタイプに所属する語は、以下のようなものがある。

|                  |
|------------------|
| 心配、配慮、用心、発想 (4語) |
|------------------|

これらの語は、語構成からみれば、「心配する」は「心を配る」、「配慮する」は「考慮を配る」、「用心する」は「心を用いる」、「発想する」は「想いを発する」のように両要素の間にもヲ格の補足関係を持つ文に分解できる。しかし、語全体の意味は、単に名詞的要素の意味と動詞的要素の意味との結合ではない。次は、辞書からの解釈である。

「心配する」：先行き不結果が起ころはしないか（どうなるか）と心を悩ますこと。

「配慮する」：想定されるいろいろな場合に対する対処の方法を考えて何かをすること。

「用心する」：不測の事態に遭ってもあわてないで済むような対策を事前に講じておいたり、心構えを怠らないでいたり すること

「発想する」：(一) その問題をどう取り扱い、どうまとめるかということについての思いつき。アイデア。

(二) [考えついた事を] 効果的な叙述・構成などによって表現すること。

(三) [音楽で] 楽曲の持つ気分などを演奏のしかたによって表現すること。

『新明解』 第五版

以上の辞書の意味から分かるように、このタイプに属する語は、表面的には、両要素の結合関係をもヲ格動詞文に分解できるが、意味的には、語全体の意味と分解されたヲ格動詞文の意味とは異なっている。これらの動詞の自動詞文は、上の種類Ⅰの自動詞文のように意味上には他動詞文の意味を表すことになれない。

このタイプに所属する「VN型」動詞の自動詞用法は以下のような例がある。

(9) 真冬でも寝室の窓をあけっぱなしにして、寒さに耐えるように身体をきたえたので、母親はたいへん心配して注意したが・・・(アムンセンとスコット)

(10) もちろん患者さんを苦しめないように配慮してはおります。(殺意の風景)

(11) 飛行機の中でずっと本を読んできたので降りたとたんに眠くなってしまった。用心したほど暑くはなく、考えていたほど・・・(インドでわしも考えた)

(12) その成立のころから、インド研究の各分野で狭い専門領域をこえて自由に発想し交流する動きが出てきている・・・(日本とインド交流の歴史)

例(9-12)の「心配する」、「配慮する」、「用心する」、「発想する」の行為者はそれぞれ、「母親」「お医者さん」「私」「研究者」という人間を推測できる。これらの動作は対象語を要らず人間の心的活動や感情状態を表す非能格自動詞文である。又、例(9-12)の二字漢語動詞の名詞的要素と動詞的要素との間は、意味上には例(1-4)のように、

(7)' ? 母親はたいへん心を配って注意したが・・・

(8)' ?患者さんを苦しめないように考慮を配って…

(9)' ?心を用いたほど暑くはなく…

(10)' ?自由に想いを発し交流する…

というヲ格他動詞文の関係になれない。これらの動詞が表す意味は、ただの動詞的要素と名詞的要素との結合で表す意味ではなく、語全体として自分特有の意味を持っていると思われる。言い換えれば、語全体で表す意味範囲は、名詞的要素と動詞的要素の結合で表す意味範囲と異なっているところがある。よって、これらの「VN型」動詞を語構成から見れば、補足関係を持つ名詞的要素と動詞的要素に分析できるが、意味からみれば緊密度が高い語全体として理解したほうがよいと思われる。

従って、この種類の自動詞文は、種類Ⅰと異なって統語上にも意味上にも非能格自動詞文になる。

以上は、種類Ⅱの非能格自動詞文の特徴と種類Ⅰとの違いを分析した。纏めると次の2点が分かった。

(ア) この種類の語構成は、ヲ格関係をもつ動詞的要素と名詞的要素で結合されたが、語全体の意味は、名詞的要素プラス動詞的要素の意味で推測できない。

(イ) この種類の自動詞文は、統語上にも意味上にも非能格自動詞文である。

## 5、おわりに

以上は、名詞的要素と動詞的要素がヲ格の補足関係を持つ「VN型」自他両用動詞の非能格自動詞文の種類、特徴及び成立原因を分析した。

語構成要素の結合によって表される意味が語全体の意味と同じである場合、そして名詞的要素と動詞的要素との間にヲ格の補足関係を持つ語は、自動詞として使われる時、統語上にはガ格の主語のみを要求する自動詞文にある。しかし、意味上には動作主格と対象格をすべて備えている他動詞文のようであるため、統語的には非能格自動詞文、意味的には他動詞文である特徴を呈している。一方、語構成要素の結合によって表される意味が語全体の意味と同じでない場合、名詞的要素と動詞的要素とはヲ格の補足関係を持つものの、文において、統語的にも意味的にも非能格自動詞文であることが分かった。纏めると次の表が得られる。

表4 種類Ⅰと種類Ⅱの比較

| 類型  | 語構成要素の意味<br>関係 | 語全体の意味と語<br>構成要素の意味 | 形式上     | 意味上     |
|-----|----------------|---------------------|---------|---------|
| 種類Ⅰ | ヲ格の補足関係        | $VN = V + N$        | 非能格自動詞文 | 他動詞文    |
| 種類Ⅱ |                | $VN > V + N$        | 非能格自動詞文 | 非能格自動詞文 |

参考文献：

- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』 明治書院
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』 くろしお出版
- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』 ひつじ書房
- 小林英樹 (1997) 「自他両用法をもつ二字漢語動名詞の意味体系における分布」『計量国語学』 21-3
- 国際交流基金 (2002) 『日本語能力試験出題基準【改定版】』 凡人社
- 王淑琴 (2016) 「漢語の自他両用動詞の構文的タイプ」『台灣日語教育學報』 No.27,135-164
- 楊嵩郎 (2009) 「国語辞典における自他認定について—自他両用の二字漢語動詞を中心に」『筑波日本語研究 (14)』, 75-95
- 森田良行 (2000) 「自他両用動詞から自他同形動詞へ」『早稲田日本語研究』 8, 74-63

#### 辞書類

- 『岩波国語辞典』 第六版
- 『学研現代新国語辞典』 第五版
- 『明鏡国語辞典』 第二版
- 『新明解国語辞典』 第五版